

## 120年の歴史の中の一人一人!

### ●浦高公開授業と浦高施設見学ツアー、その2!

今日の「浦高公開授業と浦高施設見学ツアー」の資料に、東京新聞の記事が同封されていました。

\* \*

### ◆受験刑務所じゃない 佐藤 優



先月30日、37年ぶりに母校の埼玉県立浦和高校を訪れ、生徒たちを相手に話をした。高校1年生当時の同級生で、一緒に生徒会本部をやっていた富田聡君が現在、浦和高校で国語の教師を務めている。

特捜検察に逮捕され、有罪判決が確定した筆者に話をさせても大丈夫かと不安だったが、富田君が「ぜひ、刺激的な話を生徒にしてくれ」というので喜んで引き受けた。

生徒たちには「浦高の良さは受験刑務所ではないことだ。生徒の問題意識に答えてくれる先生がいる。倫理担当の堀江六郎先生が三年生の特別授業でラインホルド・ニーバー（アメリカの神学者）の『光の子と闇の子』の英書購読演習をしてくださった。このとき、神学に触れたことが僕の一生に強い影響を与えた。また、三年時の担任だった飯島英夫先生は『問題意識だけが選考していてもダメだ。解決のための学力を身につける。その観点から受験勉強を軽視するな』と指導された」という話を披露した。その後、生徒たちと活発な質疑応答があった。

その晩、杉山剛土校長や富田君、松本浩教務主任と長時間話をした。浦和高校は受験刑務所とは本質的に異なる「文武両道」で文系、理系の枠を超えた教養と自分で考える力をつける教育を本気で考え、実践している。母校の現在の姿を筆者は誇りに思う。（作家・元外務相主任分析官）〔東京新聞『本音のコラム』10月9日〕

\* \*

浦高ホームページに、佐藤優さんが行った麗和セミナーの様子が…。

\* \*

浦高ホームページに、佐藤優さんが行った麗和セミナーの様子が…。

\* \*

### ◆エリートの条件について考える

浦和高校の先生って受験についてあまり言わないでしょ。受験について言うとみんなそのことばかり考えているから、それでプレッシャー強くてつぶれちゃうからね。ただ、それがこの学校のいいところ。

基本的に、今の日本の教育ってのは受験との絡みで言うとね勉強が嫌いになるシステムなんだ。というのはね、ホントは70点分分かればいいことを95点取らせるために努力する。だから、埼玉県の高校入試問題なんて完全にそうでしょ。あれは公務員試験と同じ。

ということかということ、記憶力のいい人間、再現力のいい人間を養成するってことなんだ。基本書を1冊か2冊に絞って、その内容を暗記して、理解できてるかできていないかに関わりなくその内容を再現する試験。

これはね、後進国の官僚養成法だよ。ということかということ、明治維新で外国の文物が入って来るでしょ。急いで警察署長や税務署長やら外交官作らないといけな。明治政府ってのは基本的薩長土肥体制で出来たけど、薩長土肥体制からこぼれても、とにかく記憶力さえよければ、出世できるって制度。それが、官僚制度だった訳。残念ながら、その情性が今でも続いている。

……

それで今、当面の皆さんの課題ってのは、やっぱり大学進学だと思う。もっと端的に言うと文系か理系かで。文系の人たち、数Ⅲまでやっていてね。学校のカリキュラムにないんだったら、Ⅲまでやるようなどっかの所で努力しておいた方がいいと思う。どうしてか、こういうことがある訳。

外務省で研修指導官やってる時に、筑波、上智、慶応、早稲田その4つを出た優秀な子たちをモスクワ大学の地理学部と高等経済大学っていうエコノミストを養成する大学に送ったんだけど、成績不良で退学にさせられた。

私はモスクワ大学でも教鞭執ってたからね、東大でも執ってたし、推薦状を書ける訳、外務省の研修生に対して。それで、私の推薦状を持たせた奴が、退学になる。ロシア語に問題があったのかって言ったら、ロシア語には問題がない。ただね、3つ問題があったって言うんだ。

1番目は、数学。偏微分が出てきたら全然分からない。偏微分が出来ないと、今、経済の本を読んでも分からないよ。数Ⅲまでやっていて、大学に入って文科系に進んでも、経済数学の授業や法学部の数学の授業を取れば、大学レベルの数学について行くことができる訳。そうすると国際的に活躍するとか、あるいは商社に入って経済関係の論文を読むときに自力で読める訳。

2番目の欠損は、論理学。日本の場合、論理だけ特別な授業してないでしょ。論理ってのは2種類ある訳。1つは非言語的な論理。これは数学Ⅱに入ってるよね。これが得意になると現代文ができるようになる。2つめは、言語的論理。これは、国際関係に非常に重要なんだよ。文化的な背景が違うでしょ。そういう人たちとの間の共通の言葉っていうのは論理で持っていくしかない。

3番目は哲学史の知識。実は、高校の倫理の教科書のレベルは、大学院と一緒にだからね。だから、高校の倫理をちゃんと勉強しておけば国際水準の哲学

の知識が身につく。哲学がなんで必要かと言うと、思考には鑄型があるから、それが入っていると大人の仕事に役立つ。インテリジェンスの世界の人の思考の鑄型、哲学、文法がある訳。そういうのも覚えると将来役に立つ訳なんだよね。

\* \*

佐藤さんのお話は非常に好評だったそうです。生徒たちにも凄く刺激的な話だったのでしょね。今日のガイダンスでも、鈴木教頭は「浦高での3年間は行事と部活と勉強しかない。高校3年間の教科書は2年生には終了し、3年生は受験のための勉強を行う。2年生で文系・理系に分かれても国公立を目指す生徒たちのために5教科7科目はしっかりと教える。塾に行かなくても授業と9時まで残る生徒同士の学習で十分。年間5回の二者面談などを通じて生徒を教師が本気でサポートする」とおっしゃっていました。時代が変わったのですねえ。

11時25分、3限目の授業見学を終えて麗和会館2階の資料展示室に集まりました。ここで、同窓会事務局長の藤野龍宏さんから約1時間にわたり説明をいただきました。

最初に「浦中画廊」では、浦中37回生（昭和11年3月卒）が3年生（昭和8年、14～15歳）の時に描いたという鹿島台校舎（現・埼玉県知事公館）

の銀杏樹の絵です。学校で保管されていた絵だけあって現代風の表現で描かれていました。旧校舎の絵や校舎の変遷と実に面白い。



〔展示物について説明する藤野さん〕



〔説明の様子〕



〔浦高の建て替えの歴史〕

続いて、7つに分けられた時代の変遷です。

1. 埼玉縣第一尋常中学校として開校（明治28～45年）
2. 大正デモクラシーの時代（大正元年～15年）
3. 昭和の浦中時代（昭和元年～22年）
4. 新制浦高と浦高ルネッサンス（昭和23年～30年代）
5. 荒れる学園から昭和50年代の安定期へ（昭和40年代）
6. 浦高第二期ルネッサンス（昭和50～60年代）
7. 節目の100周年から次の100年に向けて（平成元年～）

と素晴らしい展示です。そして、藤野さんは「浦高が変わったのは、新世紀構想をまとめて先生たちが教える学校になったことです。」とまとめました。

今回の見学ツアーを通じて、「尚文昌武」などのよき伝統は継承しつつ、常に変化している母校に一時でも席を置いていたことを誇りに思いました。

